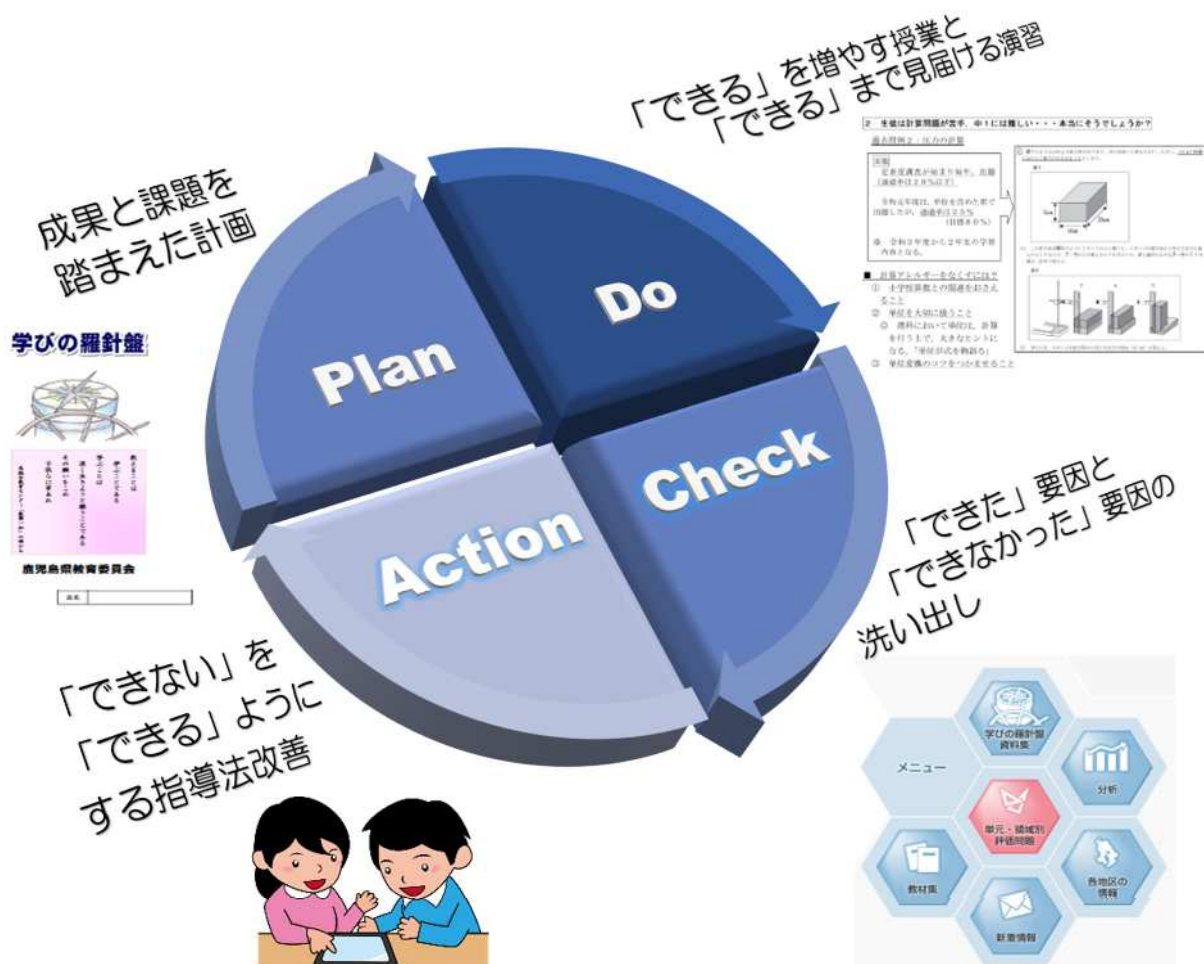


令和2年度

# 鹿児島学習定着度調査結果報告書

(令和3年1月調査)

調査結果の分析，活用に向けて  
～すべての児童生徒の力を引き出すために～



令和3年3月



鹿児島県教育委員会



# 目 次

I	調査の概要	1
II	結果の概要	3
III	特集	7
IV	本調査の活用の仕方	10
V	各教科の結果	
1	各教科の全体平均通過率	12
2	各教科の平均通過率と受検者の正答数分布（県全体）	
(1)	小学校	
・	国語	14
・	社会	15
・	算数	16
・	理科	17
(2)	中学校	
・	国語	18
・	社会	20
・	数学	22
・	理科	24
・	英語	26
3	各設問の分類と平均通過率	
(1)	小学校	
・	国語	28
・	社会	29
・	算数	30
・	理科	31
(2)	中学校	
・	国語	32
・	社会	34
・	数学	36
・	理科	38
・	英語	40
4	各教科の授業改善の視点	
(1)	国語	42
(2)	社会	44
(3)	算数・数学	46
(4)	理科	48
(5)	英語	50
VI	児童生徒質問紙の結果概要	52
VII	学校質問紙の結果概要	56



## I 調査の概要

### 1 趣旨・目的

学習指導要領において身に付けることが求められている基礎的・基本的な知識及び技能や思考力、判断力、表現力等に関する学力の定着状況を把握するとともに、児童生徒の学習に関する意識や学び方などの学習状況を把握する。

また、各学校に全体的な傾向との比較・分析などを通じて、自校の課題を明確にさせ、問題解決的な学習活動を取り入れるなど教員の指導法改善を図るとともに、児童生徒の学力向上を図る。

### 2 調査の対象学年、学級等

- (1) 県内全ての公立小学校第5学年、中学校第1、2学年の全学級の児童生徒を調査対象とする。ただし、複式学級を有する学校においては、履修していない内容を調査から除外して実施する。なお、小・中学校における特別支援学級の児童生徒については、該当学年の学習内容を履修していない教科・内容を調査から除外して実施する。
- (2) 特別支援学校においては、該当学年の学習内容を履修している児童生徒を調査対象とする。

学校種	学年	実施校	調査児童生徒数
小学校(小学部)	第5学年	490校	13,888人
中学校(中学部)	第1学年	210校	13,070人
	第2学年	214校	12,786人

※ 本調査に関わる調査問題、報告書等において、義務教育学校の第7学年を中学校第1学年、義務教育学校の第8学年を中学校第2学年、義務教育学校の前期課程を小学校、後期課程を中学校と読み替えることとする。

※ 調査対象学年に在籍者がいない学校は除く。

※ 調査児童生徒数は1教科でも学力調査を実施した児童生徒の総数を示す。各教科の調査人数は、欠席等により異なる。

### 3 調査の内容

#### 学力調査

主として「基礎・基本」に関する内容と、主として「思考・表現」に関する内容で出題し、調査対象教科の学力の定着状況（当該学年の12月終了程度までを範囲とする）について調査する。調査対象教科は以下のとおりである。

【小学校(小学部)】 第5学年 …… 国語、社会、算数、理科

【中学校(中学部)】 第1、2学年 …… 国語、社会、数学、理科、英語

#### 学習状況調査(児童生徒質問紙)

質問紙により、調査対象者の学習に関する意識や学び方などの学習状況について調査する。

#### 学校質問紙調査

学力向上の取組、校内研修の状況について調査する。

### 4 調査の実施時間

#### 学力調査

小学校(小学部) 45分(調査票の配布・説明等5分、調査時間40分)

中学校(中学部) 50分(調査票の配布・説明等5分、調査時間45分)

#### 学習状況調査

小・中学校(小・中学部) 15分(調査票の配布・説明等5分、調査時間10分)

### 5 調査の実施日

学力調査 令和3年1月13日(水)・14日(木)

学習状況調査 令和3年1月13日(水)～15日(金)

### 6 調査の採点及び結果の集計・分析

- (1) 各学校は、自校の児童生徒の調査について採点・集計を行い、当該市町村教育委員会へ報告する。また、集計結果をかがしま学力向上支援Webシステムに登録する。自校の調査結果については、保護者に対して説明責任を果たすと同時に、かがしま学力向上支援Webシステムの速報結果も参考にしながら、その後の指導方法等の改善に生かす。
- (2) 各市町村教育委員会は、管下の学校の調査結果を集計し、県教育委員会へ報告する。自市町村の調査結果については、かがしま学力向上支援Webシステムの速報結果も参考にしながら、自市町村の学力向上や指導法改善への取組に生かす。
- (3) 県教育委員会は、調査結果を集計・分析し、県全体の学力の定着状況や学習状況について公表するとともに、指導方法の工夫改善の参考となる資料を作成し、各学校に配布することにより、各学校の学力向上への取組を支援する。

## 7 学力調査の問題内容

鹿児島学習定着度調査は、次の二つの内容で出題している。

① 主として「基礎・基本」に関する問題

② 主として「思考・表現」に関する問題

※ 「基礎・基本」は評価の観点の「知識・技能」, 「思考・表現」は「思考・判断・表現」としてみるものとする。

②の問題は、次の内容を問うものとする。

教科名	番号	主として「思考・表現」に関する問題の内容
国語	1	知識・技能等を実生活の様々な場面に活用して課題解決する問題
	2	身近な資料を用いて、表現の仕方や文章の特徴を捉え、自分の表現に役立てることができるようにする問題
	3	複数の情報を関連付け、それをもとに自分の考えを論理的に書くことができるようにする問題
社会	1	社会的事象について、多面的・多角的に考察して資料を関連付けたり、比較したりして読み取る問題
	2	社会的事象について、正しいものを選択したり、相互の関係を判断したりする問題
	3	社会的事象について、特徴や背景・原因等を思考・判断して説明する問題
算数・数学	1	日常生活や社会の事象の中で、知識・技能等を活用して解決する問題
	2	示された課題解決の過程を、新たな課題に活用して解決する問題
	3	課題解決の方法や判断の根拠などを言葉、図、式、表、グラフを用いて、筋道立てて説明する問題
理科	1	観察、実験の結果（事実、データ）から結論を考察したり解釈したりする問題
	2	原理、法則を他の身近な現象に当てはめて説明する問題
	3	視覚的に実感しにくい現象をモデルで表現する問題
英語	1	聞いたり読んだりした英語の概要や要点を捉える問題
	2	自分が考えたことや感じたことを、その理由などを交えながら書くことができるよう必要な情報を聞いたり読んだりする問題
	3	コミュニケーションの目的や場面、状況等を把握した上で、文のつながりなどに注意して、適切な英文を書く問題

○ 上の表の番号が各教科の「各設問の分類と平均通過率」の「思考・表現」の欄に記載されている。

## II 結果の概要

### 1 学力調査の結果（平均通過率 [%]）

〔令和2年度〕

※  は、70%以上。  は、65%以上70%未満。

		国 語	社 会	算数・数学	理 科	英 語
小5	全 体	75.1	75.5	69.4	74.9	
中1	全 体	78.7	64.4	74.8	70.3	68.0
中2	全 体	76.7	67.6	67.0	70.8	57.8

(参考)

〔令和元年度〕

		国 語	社 会	算数・数学	理 科	英 語
小5	全 体	73.6	72.2	76.7	81.2	
中1	全 体	79.6	64.9	71.3	64.8	67.9
中2	全 体	74.5	61.2	60.7	58.0	61.0

〔平成30年度〕

		国 語	社 会	算数・数学	理 科	英 語
小5	全 体	60.1	72.9	72.8	54.6	
中1	全 体	61.9	62.2	59.7	59.2	73.3
中2	全 体	67.6	51.2	60.8	50.3	51.7

〔平成29年度〕

		国 語	社 会	算数・数学	理 科	英 語
小5	全 体	66.8	65.6	62.7	68.8	
中1	全 体	65.1	53.3	62.8	55.1	63.3
中2	全 体	63.9	57.1	59.0	46.3	59.8

## 2 概要

- (1) 毎年度、本調査の設定通過率を「基礎・基本」8割、「思考・表現」5割、全体の通過率を7割を目安に設定し、調査問題を作成している。

令和元年度の調査では、全体の通過率が7割を超えた教科が、14調査中7教科であったが、令和2年度の調査では、14調査中8教科と増えた。特に、中学校において通過率が大幅に上昇した教科が多く見られた。

- (2) 「基礎・基本」の問題に関しては、学習指導要領において身に付けることが求められている基礎的・基本的な知識・技能に関する問題等を出題した。例えば、次の問いの通過率が改善した。

小5国語：ローマ字の書き	73.2% (R元 55.9%)
中2社会：時差の計算 (※)	61.9% (R元 36.7%)
中2数学：連立方程式の立式	74.1% (R元 35.1%)
中2理科：化合物のグラフ	92.0% (R元 57.4%)
中1英語：時刻(5時30分)の聞き取り	75.8% (R元 27.4%)

(※) 時差の問題は、R元は基礎・基本、R2は思考・表現で出題

- (3) 「思考・表現」の問題に関しては、文章と図、表、グラフ、資料等を関連付けたり、根拠を基にして自分の考えを記述したりする問題、習得した知識・技能を日常生活の場面で活用していく問題等を出題した。例えば、次の問いの通過率が改善した。

中1社会：古代文明の特色	69.0% (R元 56.0%)
中1数学：起こり得る場合(組み合わせ)	75.4% (R元 54.7%)
中2数学：文字式による説明	60.7% (R元 39.8%)
中1理科：密度による物質の同定	65.8% (R元 54.9%)
中1英語：自己紹介の書き取り	60.6% (R元 45.0%)

- (4) 今年度の調査において、中1社会、中2英語では、出題傾向・難易度は変わらなかったにもかかわらず、通過率が改善しなかった。このことから、これらの教科の指導方法の改善が進んでいないことや取組が不十分であったことが明らかであり、各学校において今回の結果を踏まえた対策が必要である。

なお、小5算数については、わずかな差であるものの、通過率が7割に達しなかったため、指導内容が定着するよう一層の取組が求められる。



## 新型コロナウイルス感染症の学習への影響について

### 1 鹿児島県の臨時休業の状況（令和元年度末から令和2年度当初）

	休業期間の最も多いパターン	授業日数
1回目の臨時休業	3月2日～3月25日	17日間
2回目の臨時休業	4月22日～5月6日	7日間
合計日数		24日間



### 2 公立小中学校の学習の遅れ等の調査

「臨時休業に伴う未指導事項や学習の遅れに対する取組について」（5月調査）

#### (1) 学習の遅れ等の状況

回答内容	学校の割合
すでに指導した。	11%
指導途中である。	87%
今後、指導する予定である。	2%

(2) 今後指導に必要な時数

小学校（平均17.0時間）  
中学校（平均19.8時間）

○ 3月の臨時休業期間は、学習内容として復習の内容が多く、卒業や進級に向けての行事や、その準備の時間が多く計画されていたため、学習の遅れへの影響は少なかったと考えられる。



### 3 県教委から学習の遅れ等に対する対応の指導

「臨時休業に伴う学習の遅れへの対応に係る情報提供について（依頼）」（令和2年6月19日付）

○ 時間割編成の工夫、学校行事の精選、長期休業期間の短縮などにより授業時数を確保し、補充のための授業等を行うよう指導



授業時数確保の方法	学校の割合
時間割編成の工夫や週時程の変更	72.1%
学校行事等の精選	90.4%
夏季休業期間の短縮	78.4%



### 4 公立小中学校の学習の遅れ等の調査

「臨時休業に伴う未指導事項や学習の遅れに対する取組について」（8月調査）

#### (1) 学習の遅れ等の状況

回答内容	学校の割合
すでに指導した。	97%
まだ終了していない。(22校)	3%

(2) 終了していない学校（22校）の必要時数

小学校（平均7.9時間）  
中学校（平均4.6時間）

○ ほとんどの小・中学校が2学期開始時点で、学習の遅れを取り戻していたことにより、臨時休業の影響を大きく受けることなく、2学期からは当初の計画通りの教科指導を行うことができた。その上で、各学校は昨年度と比較して、授業改善や演習問題等に一層取り組み（P57・P58参照）、児童生徒の学力向上が図られたと考えられる。

### 3 地区別の平均通過率

#### (1) 小学校第5学年

(%)

		県全体	鹿児島市	鹿児島	南薩	北薩	姶良・伊佐	大隅	熊毛	大島
国語	全体	75.1	74.5	77.2	75.7	74.9	76.7	73.9	76.7	75.6
	基礎・基本	81.1	80.0	83.9	82.6	81.1	82.9	80.3	81.5	81.6
	思考・表現	63.1	63.5	63.9	61.8	62.3	64.3	61.0	67.1	63.6
社会	全体	75.5	74.4	78.7	78.1	73.9	76.9	74.4	78.4	77.5
	基礎・基本	80.5	79.6	83.7	83.0	79.2	81.6	79.3	81.5	82.5
	思考・表現	68.2	66.9	71.5	71.1	66.1	70.0	67.3	73.8	70.1
算数	全体	69.4	68.0	72.6	70.6	69.1	72.2	68.6	71.4	69.0
	基礎・基本	75.9	74.7	78.2	76.6	75.9	78.5	75.1	76.3	75.8
	思考・表現	53.7	51.9	59.0	55.9	52.7	56.9	52.7	59.5	52.6
理科	全体	74.9	74.9	78.2	75.6	74.3	75.2	73.2	78.8	74.5
	基礎・基本	75.8	75.3	79.2	76.3	76.0	76.3	74.2	80.5	76.0
	思考・表現	73.7	74.3	76.9	74.7	72.1	73.7	71.9	76.6	72.4

#### (2) 中学校第1学年

(%)

		県全体	鹿児島市	鹿児島	南薩	北薩	姶良・伊佐	大隅	熊毛	大島
国語	全体	78.7	80.1	78.5	78.5	77.5	78.0	76.9	81.4	78.2
	基礎・基本	82.9	84.5	82.3	81.5	81.9	82.8	81.0	82.6	82.0
	思考・表現	73.8	74.8	74.0	75.0	72.3	72.4	72.0	79.9	73.8
社会	全体	64.4	66.8	65.7	61.0	63.8	62.3	61.2	69.8	64.3
	基礎・基本	67.1	70.2	68.8	62.7	67.2	64.8	63.1	71.6	66.2
	思考・表現	58.8	60.0	59.5	57.5	57.1	57.2	57.3	66.2	60.5
数学	全体	74.8	76.7	74.5	73.6	72.8	74.2	73.8	77.3	72.7
	基礎・基本	80.4	81.6	80.7	79.2	78.4	80.0	80.1	82.5	78.6
	思考・表現	61.7	65.1	59.7	60.1	59.5	60.2	58.7	64.8	58.5
理科	全体	70.3	71.9	68.3	70.4	69.9	68.9	68.6	74.0	69.6
	基礎・基本	71.4	73.2	68.9	71.5	70.4	69.7	69.5	76.9	70.7
	思考・表現	68.2	69.4	67.1	68.2	68.9	67.3	66.6	68.3	67.5
英語	全体	68.0	70.2	67.8	65.0	67.3	67.8	65.7	71.7	65.1
	基礎・基本	67.4	69.8	67.4	64.5	66.2	67.3	64.5	71.1	64.3
	思考・表現	69.7	71.3	69.0	66.3	70.0	69.1	68.7	73.3	67.2

#### (3) 中学校第2学年

(%)

		県全体	鹿児島市	鹿児島	南薩	北薩	姶良・伊佐	大隅	熊毛	大島
国語	全体	76.7	76.6	77.4	77.6	75.5	77.9	76.5	79.1	75.2
	基礎・基本	76.8	76.8	78.6	78.2	75.1	77.1	76.6	77.4	76.1
	思考・表現	76.6	76.2	75.9	76.9	76.0	78.8	76.3	81.1	74.2
社会	全体	67.6	68.6	72.2	67.5	67.2	66.0	64.0	76.1	68.2
	基礎・基本	67.6	68.8	71.8	67.6	66.9	66.5	63.4	76.7	67.8
	思考・表現	67.6	68.2	73.2	67.2	67.8	65.0	65.3	74.9	68.9
数学	全体	67.0	69.5	68.1	68.0	64.2	67.6	63.5	69.4	62.3
	基礎・基本	71.3	73.7	73.0	73.5	68.3	71.5	67.8	73.4	66.7
	思考・表現	58.5	61.0	58.4	57.2	56.1	59.8	55.1	61.4	53.7
理科	全体	70.8	71.7	70.4	71.1	70.0	71.1	70.0	74.1	67.8
	基礎・基本	74.3	75.3	73.7	74.4	73.2	74.6	73.8	77.6	71.3
	思考・表現	62.3	63.2	62.3	63.1	62.0	62.5	60.9	65.7	59.3
英語	全体	57.8	58.5	56.8	58.1	55.8	60.8	54.5	61.9	56.9
	基礎・基本	62.6	63.5	62.2	62.5	60.5	65.6	59.1	65.2	61.7
	思考・表現	45.5	45.7	43.0	47.0	44.0	48.6	42.6	53.3	44.5

特集 1

みんなで目指そう授業力アップ!!  
～ 確かな学力を育む授業を創るために～

調査結果を分析する中で、このようなことはありませんか？



(ケース1) 県平均を、国語は10%上回っているが、数学は10%下回っている。 → 教科によって、通過率に差がある。

(ケース2) 社会の通過率は、昨年は80%だったが、今年は(学年が上がったら)50%だった。 → 同じ教科であっても、年によって、通過率が大きく増減する。

どちらのケースも、対象の児童生徒は同じです。  
異なるのは、それぞれの教員の「授業」です。



自校のどの授業でも、児童生徒に確かな学力を定着させるためには、全ての教員が、よりよい授業を行う「授業力」を身に付けることが欠かせません。昨年度、全教員の授業力アップを目指して校内研修を行ったことにより、調査結果に改善が見られた中学校(2校)を紹介しますので、今後の校内研修の在り方の参考にしてください。

〈A中学校〉(生徒数 300 人程度)

	令和元年度		令和2年度	
	中1	中2	中1	中2
国語	79.7 (0.1)	70.5 (-4.0)	83.3 (4.6)	77.9 (1.2)
社会	59.7 (-5.2)	57.9 (-3.3)	66.2 (1.8)	66.0 (-1.6)
数学	70.5 (-0.8)	55.4 (-5.3)	76.4 (1.6)	69.1 (2.1)
理科	58.9 (-5.9)	48.2 (-9.8)	67.8 (-2.5)	66.6 (-4.2)
英語	63.6 (-4.3)	60.5 (-0.5)	62.4 (-5.6)	59.5 (1.7)

〈B中学校〉(生徒数：600 人程度)

	令和元年度		令和2年度	
	中1	中2	中1	中2
国語	75.6 (-4.0)	69.9 (-4.6)	76.9 (-1.8)	72.8 (-3.9)
社会	58.3 (-6.6)	62.3 (1.1)	68.4 (4.0)	71.2 (3.6)
数学	66.6 (-4.7)	68.3 (7.6)	70.5 (-4.3)	77.5 (10.5)
理科	54.4 (-10.4)	54.9 (-3.1)	69.1 (-1.2)	70.0 (-0.8)
英語	57.2 (-10.7)	51.3 (-9.7)	65.7 (-2.3)	55.8 (-2.0)

※ A校、B校は「学びの組織活性化」推進プロジェクトの指定校

各教科の数値は通過率、( )内の数値は県平均との差、黒塗りは県平均を上回った値を示している。

A中、B中の令和2年度の特徴  
(令和元年度との比較)

- 県平均を超えた教科が増えた。また、全ての教科で県平均との差が縮まるなど改善が図られた。
- 目標通過率である7割を超えた、または、7割に近づいた教科が増えた。
- 中2の生徒は、中1の時点と比べ、全ての教科において、結果が改善している。



ココがPoint!!

授業参観で児童生徒の学びを見取ること、見取った事実を基に協議することが教員一人一人の授業力アップにつながりました。教科の専門性(見方・考え方)の違いによって生じる多様な見取りを共有することで、協議が一層深まりました。

こんな校内研修やりました!!

- 教科、学年を超えた授業参観及び授業研究
- 教科を超えた共通実践事項の設定と成果の検証

〈研修を行うためのマネジメント〉

意図的な研修計画の策定、時間割の調整、  
授業分析方法の工夫、外部講師の活用・・・



※ ここでいう「演習問題」とは、過去の学力調査問題や県教委作成の問題等のことです。

県教委が「演習問題」の積極的な活用を推進するのには、次の理由があります。

**「演習問題」には、育成が求められる資質・能力が具体化されている。**

県教委が県下の学校において積極的に活用してほしい「演習問題」は、学習指導要領で育成が求められている資質・能力を具体的な形で示したものです。このことから、全ての児童生徒が「演習問題」に正解できることを目指し、教師は指導する必要があります。

また、「演習問題」を参考にして、教師自身が学習評価のための単元テスト等の評価問題を作成することは、教師がより深く育成すべき資質・能力を理解することになります。

校内評価率			出題の意図
解答率	基礎・基本	思考・表現	
0.1%	0.0%	0.0%	日常学習場面における基礎を固め、 評価問題を演習することが出来る。 日常学習場面における基礎を固めて、 評価問題を演習することが出来る。
0.0%	0.0%	0.0%	

本報告書 pp. 28-41  
 の「出題の意図」や全国  
 学力・学習状況調査  
 の解説資料を参考に  
 することで、学校独自の  
 類似問題も作成でき  
 ます。

全国学力・学習  
 状況調査  
 関係資料

**「演習問題」の活用は、授業改善につながる。**

「しっかり授業しているはずなのに、調査等で児童生徒がつかず  
 いている。」それは、普段の授業が知識等の一部の学力のみを付ける  
 ものになっており、資質・能力が十分に育成されていないことを意  
 味しています。調査問題は、今求められる資質・能力を問う問題が  
 多く出題されています。このような力は、授業で確実に付けていか  
 なければならない力であり、普段の授業をそのような授業に転換し  
 ていく必要があります。そのための授業改善のヒントは、「演習問題」  
 を分析し、活用することからも得ることができます。

例えば、以下のような方法が考えられます。

- 扱われる題材やテーマをそのまま授業に取り入れる。
- 問題の中にある、子供たちが自ら課題と向き合い、解決する  
 場面を授業に取り入れる。
- 問題の中の問いを、授業中の発問に使う。 など

なお、児童生徒が調査問題を解けない状態が続くということは、  
 教師としても、できない問題をできないままにしておくこととなり、  
 課題を解決せずに先送りしていることとなります。

授業改善の具体的なアイデアについては、右の県教委や国立教  
 育政策研究所が提供する資料等を参考にすることが考えられます。



県教育委員会  
 「鹿児島学習  
 定着度調査結  
 果報告書」  
 (平成25年度～)



国立政策研究所  
 「使ってみよ  
 う! 学力調査」  
 (令和2年度)



**「演習問題」への計画的な取組は、児童生徒に自信を与える。**

「昨日よりも今日、授業前よりも授業後の方が、自分のできることや正解できる問題が増えて  
 いる」という経験は、児童生徒に自信を与えます。そのためにも、普段から児童生徒のできるこ  
 とを増やす授業を行うことはもとより、「演習問題」についても、児童生徒が自分の力で解けるま  
 で繰り返し扱うことが大切です。また、類似の問題に取り組ませることは、児童生徒がその中  
 で問われている教科の本質（教科ならではの見方・考え方）を理解して、その学びを他の問題にも  
 応用できるようになることにつながります。

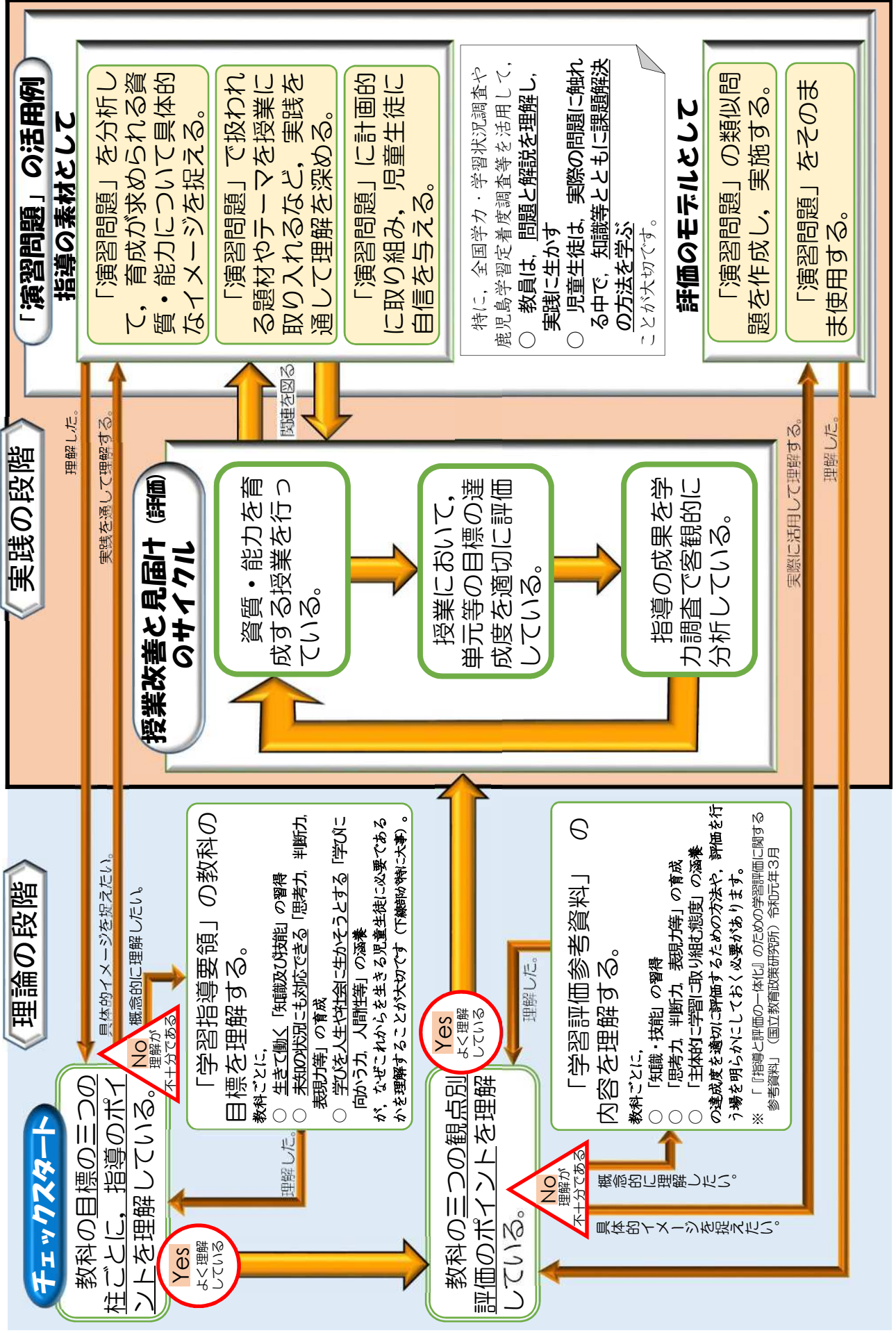


これまでの自校における指導を振り返り、今後の指導について考える  
 ために、次ページのセルフチェックシートを基に話し合ってみましょう。

# 未来の創い手を育成する セルフチェックシート

確かな学力を定着させるためには、求められる資質・能力を育成する授業づくりと確実な見届け(評価)のサイクルを確立する必要があります。この「演習問題」の活用はそのための効果的な取組となります。

※ ここでいう「演習問題」とは、過去の学力調査問題や県教委作成の問題等のことです。これらには、学習指導要領で育成が求められる資質・能力の具体が示されています。



## IV 本調査の活用の仕方

- (1) 問題の内容や自校の平均通過率、無解答率等を学校全体で共有する。
  - (2) 自校の成果や課題から要因となった取組を明らかにし、改善策を検討する。
- ※ 本調査は単に対象学年の状況のみを問うものではないため、校内で指導法を共有する際には、学年・教科を超えて行う。特に、学校全体で課題を共有するために、各教科等の年間指導計画の中に重点事項として、取組内容等を位置付ける。

### 1 自校結果の把握と分析 **Check**

- 県全体の平均通過率を踏まえた、領域や単元ごとの通過率や無解答率の状況に関する分析
- ※ 「2 各教科の平均通過率と受検者の正答数分布（県全体）」(p. 14～) やかごしま学力向上支援Webシステムの分析機能を活用しましょう。



- ※ 校内研修等で「3 各設問の分類と平均通過率」(p. 28～) に自校の教科全体の平均通過率を記入し、全体の傾向をつかむようにしましょう。

### 2 自校結果の活用 **Action ⇨ Plan ⇨ Do**

- 「学びの羅針盤 (p. 2, 22)」の活用
- 他校の実践や取組からの学び
  - ※ 市町村教育委員会等と連携を図り、成果の上がっている学校の授業参観を行うなどして、効果的な取組を学び、児童生徒の実態に合わせて自校化しましょう。
- 改善に向けた取組の年間指導計画への位置付け
  - ※ 意図的・計画的な指導を行うために、年間指導計画の中に改善を要する取組を位置付けましょう。
- 補充指導の充実
  - ※ 当該単元での指導直後だけでなく、必要に応じて学年を超えて定着度を確認したり、個に応じた補充指導をしたりするなど学校全体（教科全体）で取り組みましょう。
- 「4 各教科の授業改善の視点」(p. 42～) 及び「かごしま学力向上支援Webシステム」に掲載されている評価問題の活用
- 児童生徒質問紙や学校質問紙の結果分析と指導方法改善

### 3 本調査結果を生かした年間指導計画例

#### 理科 年間指導計画 第1学年

〇〇中学校

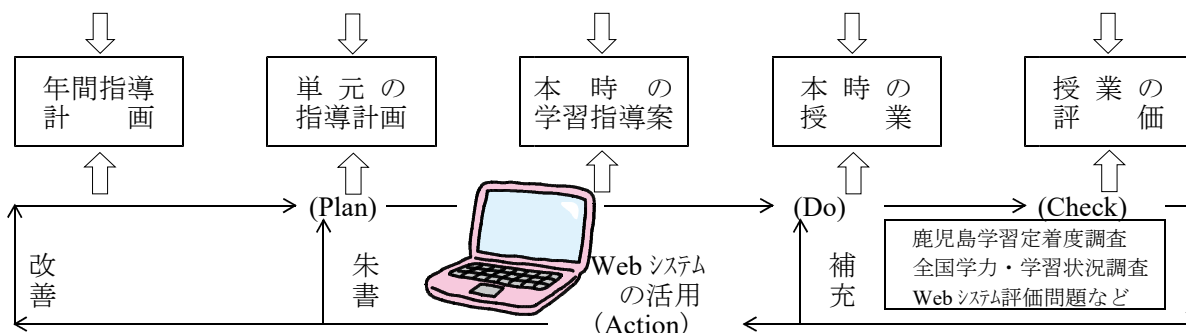
※ 指導計画に自校の平均通過率、県平均との差、重点項目を朱書き（表中：下線部）したものを。

月	主な学習活動	観点	観点	評価規準と方法
5	<p>裸子植物と被子植物</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>マツの花を、アブラナやフジの花と比べてどのような特徴があるか考える。</li> <li>果実をつくらぬ植物には、果実をつくる植物と比べると、どのような特徴があるだろうか。</li> <li>マツの花のつくりを調べる。</li> <li>種子をつくるが子房がない植物を「裸子植物」ということを理解する。</li> <li>被子植物について理解する。</li> <li>教科書の図や写真、これまでの観察記録を見ながら、被子植物、裸子植物の共通点と相違点を考えて話し合い、発表する。</li> <li>自分の考えをまとめ、確認する。</li> </ul>	知識・技能	○	<p>種子植物には被子植物と裸子植物があることを理解し、これまで観察した被子植物と裸子植物の共通点や相違点について考察したことを表現しているか。</p> <p>【行動観察・記述分析】</p> <p><b>R2 定着度</b></p> <p><b>1 (2) マツの花のつくり</b></p> <p><b>県平均 62.8% (自校: -5.4)</b></p> <p><b>1 (3) 裸子植物と被子植物のつくりの特徴</b></p> <p><b>県平均 87.5% (自校: -5.4)</b></p>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>花がさいていない時期に種子植物を分類できるか、基準を考えてみる。葉のつき方、葉脈、葉の大きさ、葉の形、根の形などに注目する。</li> <li>いろいろな種子植物の葉を観察し、共通点や相違点を見つける。いくつかの植物の葉の特徴から、分類の基準を考える。</li> <li>葉脈が平行か、網目状かで、被子植物がさらに分類できることを見いだす。</li> <li>平行脈の植物はひげ根、網状脈の植物は主根と側根をもつことを見いだす。平行脈の植物は子葉が単子葉、網状脈の植物は双子葉であることから、単子葉類と双子葉類に分けられることを知る。</li> </ul>	思考・判断・表現	○	<p>いろいろな葉の共通点と相違点を考え、葉脈で2つのグループに分類できることを見だし、葉脈と根の形状、子葉のようすとを関連づけて考え、双子葉類と単子葉類の特徴を見いだして表現しているか。</p> <p>【行動観察・記述分析】</p>
2	<p>【実習1】地震の波の伝わり方</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>実習1を行い、地震のゆれの伝わり方の特徴を調べる。</li> <li>地震計のしくみについてふれ、その記録から地震のゆれには初期微動と主要動の2種類があることを説明する。</li> </ul>	思考・判断・表現	○	<p>地震の波の伝わり方の特徴について、ゆれ始めの時刻と震央からの距離との関係性、および震度と震央からの距離との関係性を見いだして表現しているか。</p> <p>【記述分析】</p> <p><b>H30 全国学調</b></p> <p><b>7 (1) 震度とS波による揺れ</b></p> <p><b>県平均 55% (自校: -5)</b></p>

#### 【指導計画見直しのサイクル】

よりよい授業を構想するためには、実践に基づいた指導計画を立てる必要がある。また、指導計画は授業を行った後に適切な評価を行うなどして、改善していかねばならない。そのためには、「計画 (Plan)」（年間指導計画、単元の指導計画・評価計画、1 単位時間の指導計画・評価規準）—「実施 (Do)」（本時の授業）—「評価 (Check)」（授業の評価）—「改善 (Action)」（計画の見直し）のサイクルを下図のように繰り返しながら、絶えず見直し、改善していくことが大切である。評価に際しては、本調査の積極的な活用を図る。

- 学習指導要領及び学習指導要領解説（文部科学省）の熟読、教科書の研究
- 学校、地域、児童生徒の実態把握、学校の教育課程の理解
- 教材研究、教材開発、指導法研究等



（「令和2年度教職員のための研修の手引」（鹿児島県教育委員会）参照）